

渡島地域ユニオン・道南医療会議合同「2014新入組合員研修会」

久々に好天に恵まれた6月21日(土)午後1時より、函館市内「ホテル万惣」において、渡島地域ユニオン・道南医療会議合同による「2014新入組合員研修会」が開催されました。

両団体から新入組合員・各組合役員さらには関係団体からの参加も含めて、65名が集まりました。

【新入組合員研修とは？】

開会にあたり、主催者を代表して挨拶に立った渡島地域ユニオンの米坂執行委員長(連合渡島地域協議会事務局長)は、今回の学習会の意義に触れ、

◇ 景気回復の兆しを感じられない道南地域における新規採用者はまばらであり、企業毎には1～2名程度の状況である

◇ 大手組合は独自に新入組合員研修が行われるが、地場中小労組においては個別に研修会を行う環境は整っていない

◇ 高卒採用者で3年以内に会社を辞めていく人が北海道では51%を超えており、社会人になって様々な悩みを気軽に相談できていない現状が見受けられる

◇ 職場に存在感のある労働組合、労働組合を身近に感じることで、様々な悩みや課題を共有化し、「個」から「仲間」を意識してほしいと、集まった参加者に訴えました。



【労働組合の意義と責任、そして参加を】

講座の第1課題は「地域労働」組合構成と労働組合の役割」と題し、渡島地域ユニオンの八木橋執行委員長代行(連合渡島地域協議会副事務局長)が担当。

私たちにとって労働組合とは何か、その歴史と営み、運営方法と労使の在り方、更には組合員としての権利と義務等々について、ジョークを交えて講演しました。

新入組合員にとっては「労働組合」の言葉は知っているものの、詳細を聞くのは初めてだったこともあり、真剣な症状で聞き入っていました。また、参加した組合役員にとっても忘れがちな基本を再度学び合うことは、ある意味では新鮮な気持ちになれたものと思われました。

【森の里病院労働組合結成までの経緯と現状】

第2講座は、実際に労働組合を結成した二労組から、「何故？労働組合を結成したのか」、結成までの苦労と結成後の具体的取り組みを現状について報告がされました。

最初に登場したのは道南医療会議から「森の里労働組合」の大水委員長。

森の里病院の概略から入り、労働組合結成に至るまでの経過について触れ、



■ 組合結成前は、賃金カット・賞与削減・手当の廃止、労働条件の低下等々、施設側から一方的に実施され、多くの仲間が施設を辞めようとしている状況下で、一人ひとりに労働組合の必要性を説明し、組合結成に向けた気持ちが一致した。

■ 労働組合を立ち上げることで辞めていく人もなくなり、賃金カット・賞与削減・手当の廃止等々に対しても撤回させることができた。

■ 現在の組合加入率は、97%台で100人を超える組合員が結集している。理事者側とも積極的な対話を求めつつ、職場の環境改善、組合員の労働条件の維持・向上を積極的に求めており、労働組合の存在が認識されている。

■ 病院の収益をあげるため、「企画・運営委員会」を設置させ、組合側からも参画するようになった。

等々についてパワーポイントでグラフや略図にまとめながら解りやすく説明されました。

【函館公清労働組合結成に至った経過と現状】

続いて壇上に立ったのは、労働組合結成から2年となる渡島地域ユニオン中小労連支部「函館公清労働組合」の掘抜執行委員長。

■ 函館市の清掃事業を請け負う会社の従業員として働いているが、賃金や残業代・仕事の在り方の課題をはじめ、働く環境改善や労働条件の向上を求めて労働相談を入り口に労働組合結成へと結びついた。

■ 少ない人数ではあるが、一人ひとりに呼び掛けを行い、粘り強く説得する局面もあったが、過半数を超える理解と協力を得ることが出来、結成総会を行った

■ しかし、労使間における話し合いは可能となったものの、要求に対する会社姿勢は頑なであり、一度は北海道労働委員会への調整・斡旋も考慮したが、上部団体の協力を得て、現在も交渉は続けられている

■ 徐々にではあるが、社内において労働組合が認知され、応援する声も聞かれるようになった

と、厳しい現状に対する報告が行われるとともに、今後の幅広い支援を訴えました。

両組合代表の報告は、厳しい中から生まれた「労働組合」が果たしている役割や、組合員との信頼関係の構築等、地道で丁寧な日々の活動に感動すら覚えるものでした。

【社会人としてのライフワークのお手伝いも】

次の講座のテーマは、新社会人となった新入組合員のライフワークに視点をあてた、労働者自主福祉運動の重要性についての学習。

決して多くはない「賃金」を効果的・効率的に活用し、今後のライフステージを求め一助を担って行くことを主眼に、労働福祉団体の労働金庫函館支店と全労済道南支店に講演の協力を求めたものです。



両団体共に工夫した講演がされ、単に商品説明ではなくそれぞれの組織が結成された背景や歴史・経過、更には現状報告が説明されました。両団体共に労働者のために労働者自信が立ち上がり、設立した組織であり、営利目的でなく相互扶助を基本とした運営を行っていることを訴え、可処分所得をより効率的に利用する方法が説明されました。

特に、労働金庫からは「財形貯蓄」の有効的な活用が勧められ、低額からでも

可能であり、身近な貯蓄として「若い人も、そうでない人も是非！」と熱く語っていました。

全労済からも、民間損保保険と全労済の違いについて訴えるとともに、保障内容を考慮した時、全労済の商品を活用することで組合員のライフステージを手助けしていくことが話され、参加者の興味を引いていました。

【交流・懇親会も和気藹々と】

全体学習会を終えて総括挨拶に立った道南医療会議の渡部議長（亀田病院労働組合副執行委員長）は、「初めての試みであったが、非常に有意義な学習会内容であった。組合結成報告の二労組には感動すら覚えた。出来れば今後も継続して開催してくことで渡島地域ユニオンと協議していきたい」と成功裏に終えた合同研修会の総括を行いました。

席を移して行われた懇親会は道南医療会議・石川事務局長の司会で進められ、緊張感から解放された60名近い参加者が和気藹々のなか交流を深めました。

交流会の中では、参加者から「入社してから間もないが、労働組合は立ち寄りがないものと思っていたし、身近に感じたことはなかった。しかし、今日の学習会に参加し、多くの人と知り合う機会を得て、労働組合に対する見方が変わった。これからは機会をみて参加してみたい」と自ら話しかけてきたのが印象的でした。

また、別の組合からは、早速、「財形貯蓄」に複数人が加入する旨が話され、労金担当者が会場内を走り回る様子から、講演の即効性を感じました。

【今後の継続に向けた検討を】

今回、初めての企画として地域を横断した「合同新入組合員研修」を実施しましたが、職場における労働組合の存在価値、仕事や職場環境に対する不満や不平・悩みを共有できる仲間づくり、地域の多くの仲間との連帯、労働福祉団体との接点等々、多くの成果を残したと評価できるものでした。

特に、労働組合の無かった職場環境と結成された以降の変化は顕著であり、如何に職

場における労働組合が必要なのか、どのように関わっていくべきなのか、社会人としてのライフステージを創り上げていく重要性等々、社会人として・地域人として・企業人として・組織人として・組合員として如何に生きていくのか改めて考えるきっかけとなったのではないのでしょうか。

今後も可能な限り継続をしていく方向で検討を進め、地域で働く仲間の「労働組合」に対する価値観を共有化し、その意義や歴史・経過を共有化しながら、「身近な労働組合づくり」や「地域に顔の見える労働運動」前進の一助としていきたいと考えています。